法の水茎 (46)

大正大学講師　高橋秀城

桜散る
　木の下風は
　　寒からで
　　空に知られぬ
　　雪ぞ降りける
（『拾遺集』紀貫之）

（桜が散っている。木の下を吹き抜ける風は寒くないのに、空から降ったわけではない雪のような花びらが舞っているよ）

今年はどのようなお花見をされたでしょうか。梢から舞い降りる薄紅色の花びらを見つけると、つい手を差し伸べたくなります。掌に収まった一片の桜を目にしたとき、何とも言えず幸せな気持ちになるのは、全身で春爛漫を感じ取ったからなのかもしれません。

高尾山にも多くの桜が植えられています。仁王門前の枝垂れ桜や奥の院の山桜も、きっと見頃を迎えている頃でしょう。こうした変わらぬ春景色は、幾代にもわたって受け継がれてきたものです。

高尾山薬王院の聖域を表す浄心門をくぐると、左手に大きな、

殺生禁断

の石碑が建っています。「殺生禁断」とは、「生き物を殺すのを禁じる」という意味です。「不殺生」とも言い、仏教に限らず重く戒めています。

真言宗で重んじられる教えに「十善戒」があります。お寺やお仏壇の前で、お唱えになっている方もいらっしゃるでしょう。「十善戒」には十種類の善い行いが説かれているのですが、その最初に挙げられているのが「不殺生」です。

「殺生禁断」は、日本においても古くから守られてきました。大宝元年（七〇一年）に定められた「大宝律令」では、とりわけ身を清らかに保つべき六斎日（毎月八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日の六日間）には、人の命はもちろん、鳥や魚といった動物の命を奪うことも固く禁じています。

殺生をめぐっては、次のような話があります。

昔、下野国阿蘇沼（今の栃木県佐野市浅沼町）という所に、いつも鷹狩をして殺生をする男がいました。ある時、鴛鴦の雄を捕まえると袋に入れて持ち帰りました。

するとその夜の夢に、身なりも美しく上品な女房が現れます。本当に恨めしそうに涙を流しながら「どうして嘆かわしくも、私の夫の命をお取りになったのですか」と話すのでした。男が「身に覚えがない」と答えると、女房は「確かに今日、夫を召し捕って行ったのに」と悲しみながら、

日暮るれば
　いさやと云ひし
　　阿蘇沼の
　　まこも隠れに
　　独りかも寝む
（『沙石集』）

（日が暮れると、さあ床に就こうと言ってくれた夫がどこにもいない。これからは阿蘇沼の真菰の陰で、ただ独り眠ることになるのでしょう）

と歌を詠むと、ふわふわと飛んで行きます。その姿を見上げると、なんと鴛鴦の雌でした。

男は驚き、深く反省します。それからは殺生をすることなく、出家して仏道修行に明け暮れたのでした。

（無住『沙石集』）

仲睦まじい夫婦を「鴛鴦夫婦」と言い、それは鴛鴦の雄と雌とが、いつも寄り添っているところから名付けられたと言われます。「相思相愛」を引き裂かれた女房の心中は、どれほどの痛みに打ちひしがれていたのでしょう。

高尾山の聖域に至ると「殺生禁断」の石碑がある

鴛鴦の雌は、鴛鴦の雄を捕まえるために、自分自身もいつしか「朽ちることのない余薫」を身につけることができるでしょうか。桜の花びらを散らす風を恨むこともなく、ひらひらと舞う花びらを眺めながら、枝先に芽吹く、小さな若葉を探してみます。

（栃木北部教区普濟寺中）

折り折りの記 (80)

高尾山のケーブル駅に燕くる

波多野　重雄

鳥類の研究所によれば、燕の越冬地はマレー半島やフィリピン等とされ、前年と同じ巣に戻るという。

帰ってきた燕は高尾山ケーブルカーの駅舎の簗に巣づくり中で、雛へ餌を運ぶため賑やかにとび交う。

待合室の登山客は、黄色い声を上げ、親の運ぶ餌を競い奪う雛に心が和む、近時の新聞種の、殺伐たる子等の事件を払拭。やがて、巣立ち、我が物顔に流れ飛ぶ燕の群れは、観光客の間隙を縫う。

（高尾山健康登山の会々長）

百観音霊場巡礼（十八）

春遊鎌倉

厚木市　荒井　一雄

登段到仏閣
礼拝杉本寺
請掛軸朱印
僧書秀逸字

ここよりぞ
はじめし坂東札所巡り
大慈・大悲にすがりつきける

春、鎌倉に遊ぶ

石段を登り、
仏閣に到る・・・
礼拝す、
杉本寺（十一面観音像）を・・・
掛け軸にご朱印を請へば、
僧は書く、
秀逸なる字にて・・・

人間を殺せば、訴えによって裁かれます。しかし、動物は訴えることができないので、山野や川に住む動物を、人間の心のままに殺して食べているのです。訴えないからといって、殺生を恐れないのは愚かなことです。人は、これまでいただいた命を、何世代にもわたる恩人として感謝しなければなりません。

（無住『沙石集』）

人も動物も同じ命と肝に銘じ、これまで得てきた多くの恩を噛み締めることが大切なのでしょう。それは「不殺生」という言葉が、身近な戒めとして見えてくる第一歩のように思われます。

高尾山薬王院前御貫首山本秀順師（一九一一～一九九六）の言葉に、

そっとしておく愛情

という教えがあります

（『高尾山報』二八号）。

私の座右の銘でもあるのですが、師は「生きているチョウに手をふれないでそっとしておく、咲いている花を折りとるのではなく、しずかに鑑賞する、それが愛の最高の姿」として、「不殺生」の教えが動植物にまで及ぶことを示されました。

「そっとしておく愛情」とは、相手に楽しみを与える「慈」、相手の苦しみを取り除く「悲」、相手の幸せを共に喜ぶ「喜」、相手に対して落ち着いた心でいる「捨」という人間にとって大切な四つの心（四無量心）の中でも、とりわけ「捨の愛情」に当てはまると説かれています。己の欲望のままに行動してしまうことが多い中で、有りの儘を見つめることが心の安心につながることを諭してくださっているように感じます。

先人が残した恩徳を「余薫」と言います。高尾山の春の香りは、古から受け継がれてきたものに他なりません。「殺生禁断」の教えを胸に刻めば、自分自身もいつしか